



Title	農家婦人の労働生活：洞爺村の実態分析を中心に
Author(s)	千葉, 悦子
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1975, 29-43
Issue Date	1976-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28572">https://hdl.handle.net/2115/28572</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	1975_P29-43.pdf



# 農家婦人の労働生活

—— 洞爺村の実態分析を中心に ——

(卒業論文要約)

社会教育ゼミ4年目 千葉悦子

## 1 はじめに

戦前、日本の農家婦人は絶対主義天皇制下の半封建的寄生地主制のもとで高額小作料のおしつけによって、苛酷な農作業に従事する一方、家族内においては家父長制のもとで「家の嫁」として忍従の生活をしいられていた。戦後、封建的くびきから解放され、農家婦人の地位も上昇していく。しかし「高度経済成長下」に入って打ちだされる、「構造農政」「総合農政」等の一連の農業政策は、農村を低賃金の基盤として、低価格農産物確保としての食糧生産部門として、また若年労働力を非農業部門へひきだしていく労働力の供給部門として位置づけてきた。

そして、農村における労働力の減少と労働力構成の劣弱化は「農家婦人の問題」をクローズアップさせてきている。農家婦人の農業従事率の高まりは、家事労働との板ばさみの中で健康破壊を進行させ、農業の近代化による農薬や機械による農業災害などもうみだしている。加えて近年、農家婦人の農外就労の全国的規模の進行は、健康状態の悪化、家庭生活の貧困などもうみだしている。資本に包摂されていく中で、今や農家婦人は新たな苦悩の中にいるといえる。

本論文では1970年以降、「総合農政」下に入って食糧需給の変化に対応して、消費農産物市場として急激に野菜主産地として形成されていった「洞爺村」を実例にして、地域農業の発展方向と、その地域農業を支える主要な担い手としての農家婦人の実態と、主体形成のすじ道を考察したい。

## 2 洞爺農業の概況

農業の近代化政策の破綻によって、農業危機が深化している中であって、洞爺農業は着実に前進している（詳しくは三上論文にゆずる）。

洞爺湖に沿ってわずかな平坦地を除き、ほかは摺鉢状のような南下りの傾斜地の多い下台地区は、以前高級葉豆、小豆の主産地であったが経営が不安定であった。昭和40年以降、「そ菜技術研究会」を中心とした生産技術学習、共同育苗を行ない、さらに農協による共同出荷、共同撰果を経て昭和46年からの第二次構造改善事業によって大型ハウスを導入して施設園芸団地をつくり野菜の主産地を形成している。

羊蹄山麓に続き、比較的平坦な高台地区は心土破碎、反転客土を経て、堆肥生産による地力維持をはかりながら（和牛飼育農家が多い）小豆、菜豆、ピート、ばれいしょなど一般畑作が中心となっている。さらに近年高原野菜等の導入の動きがみられ、アスパラガスの生産も高まっている。

洞爺農業を支えるものとして「研究会活動」があげられる。「そ菜技術研究会」をはじめとして「機械化研究会」「ユリ根生産組合」「和牛生産組合」等の自主的活動がさかんである。さらに、農協の農民主体の運営姿勢が大きい。農協と役場と改良普及所が一体となった営農対策協議

会での農業の方針化は重要である。

### 3 洞爺農家婦人の実態

調査対象と方法、調査内容項目は表1、2を、調査対象者の概況は表3～7を参照していただきたい。下台・高台の比較を中心とし、経営形態別の階層類型なども検討しながらのべてみたい。

表1 調査対象と方法

調査対象	下台15戸、高台26戸
抽出方法	階層のかたよりがないように抽出
調査方法	経営主とその妻に面接調査
分析対象	調査対象農家下台15戸、高台26戸を農業の概況と階層の判断にもちいるが、家事専門、調査時の不在者を除き、下台13戸、高台22戸を用いる。
分析視点	経営形態の異なる下台、高台地域の比較検討 両地域内の階層による比較検討 場合に応じて年齢による比較検討

表2 調査内容

1 調査対象者及び世帯の概況	年齢、家族構成、農業経営状況
2 婦人と農業労働	労働力・農業従事日数・経営規模から 農業の従事状況とその強度から 農作業、農業経営における地位から
3 婦人の健康と休養	農作業に伴う疾病 病気の発現、農夫症点数による疲労度 母性保護にかんする状況 過労の自覚、休養、疲労の解決方法 医療問題
4 婦人と家庭生活	生活時間の実態、家庭管理、家族内(夫)の協力度
5 婦人の社会活動	部落会・研究会・農協婦人部・若妻会の参加状況
その他、農協婦人部長、美沢生産婦人部長、西胆振地区生活改良普及員のききとり	

表3 婦人対象者の年齢別構成

年 齢	下 台		高 台	
	人 数	比 率	人 数	比 率
20～29	2	15.4%	3	13.7%
30～39	1	7.7	2	9.1
40～49	5	38.5	12	54.5
50～59	5	38.4	5	22.7
平均	42.8歳		40.9歳	

(注) 全対象者数 下台13人  
高台22人

表4 家族形態

	下 台	高 台
夫婦家族	6戸40% (5戸38.5%)	12戸46.2% (9戸41.0%)
直系家族	9戸60% (8戸61.5%)	14戸53.8% (13戸59.0%)

(注) 農家戸数 下台15戸 高台26戸  
( )は婦人調査農家について

表5 家族員の構成比

家族員数	下台		高台	
	戸数	比率	戸数	比率
3	1	7.7%	0	0%
4	3	23.1	4	18.2
5	4	30.7	6	27.3
6	2	15.4	6	27.3
7	2	15.4	3	13.6
8	1	7.7	2	9.1
9人	0戸	0	1戸	4.5
平均	5.3人		5.8人	
全戸数	13戸		22戸	

表7 家族労働力

労働力数	下台		高台	
	戸数	比率	戸数	比率
2	4	30.7%	5	22.7%
3	5	38.5	9	40.9
4	3	23.1	6	27.2
5人	1戸	7.7	2戸	9.1
平均	3.1人		3.2人	

(注) 対象農家 (下台13戸  
高台22戸  
全農家平均では (下台3.13人  
高台3.12人

表6 階層別、家族数、労働力、耕地面積、従事日数

階層	家族数	労働力	耕地面積	婦人の 従事日数	のべ従事 日数
(下台)					
a	5.3	3.9	3.8	282.1	815
b	8	4	5.2	250	710
c	5.3	2.7	8.8	213.8	580
d	4.7	2.7	4.4	236.7	463.3
(1-1)	(7)人	(5)人	(28.5)町	(255)日	(1,055)日
平均	5.47	3.13	5.7	254.1	706.7
(高台)					
a	5.69	3.5	16.4	200	970
b	6.8	3.8	10.8	260	666
d'	8	4	11.7	254.5	860
c	4.8	2.8	8.4	205	599
d	4.6	2.7	11.4	205	597
(2-18)	(4)	(4)	(8.5)	(300)	(580)
(2-24)	(5)人	(3)人	(7.1)町	(200)日	(600)日
平均	5.69	3.12	10.08	229.1	662

(注) 類型区分は次のとおり

※ (下台)  
 a ハウス+露地 (上~中農上層)  
 上層 b 畑+畜+水 (中農層)  
 ↓ c 畑専業 (中農~中農下層)  
 下層 d 畑作+露地 (中農下層)

高台  
 (高台)  
 a 畑作+畜産・野菜 (上層)  
 上層 b 畑作+畜作中心 (中農上層)  
 ↓ d' 畑専業 (中農上層)  
 c 畑作+野菜中心 (中農層)  
 下層 d 畑専業 (中農下層)

対象者  
 下台15人  
 高台26人

農業労働の実態を表6でみると年間従事日数は200日を超える高い数値を示し、畑作専業農家では比較的少ないが下台のハウス農家を最大にして、高台の畑作+野菜の中農層で高いことがわかる。さらに経営形態別の農作業の従事状況について図1~3をみると畑作の従事率が低いのに対し、野菜栽培とハウス栽培は従事率が50%を超える農作業が半数をこえている。こうしたことは表18(A)(B)の農作業時間にも顕著にあらわれている。下台ハウス農家婦人は男子とかわらぬ質・量の仕事をしない主要な担い手として存在しているし、高台の野菜導入農家婦人も野菜部門の担い手として、農業労働における婦人の比重を高めていることがわかる。これらを踏ま

図1 畑作農作業従事率

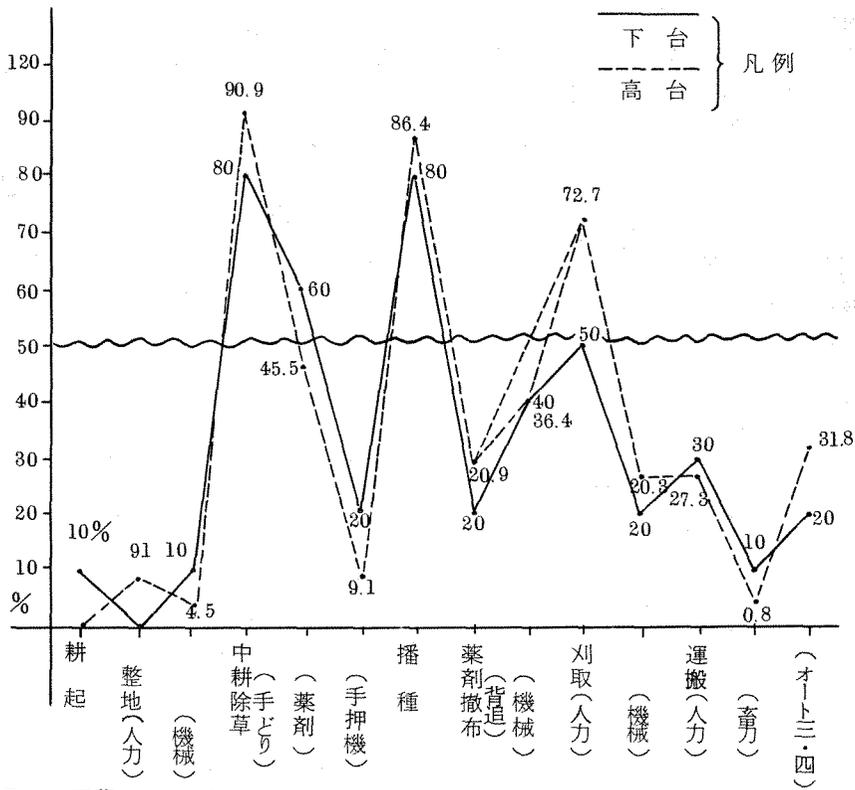


図2 野菜栽培農作業従事率

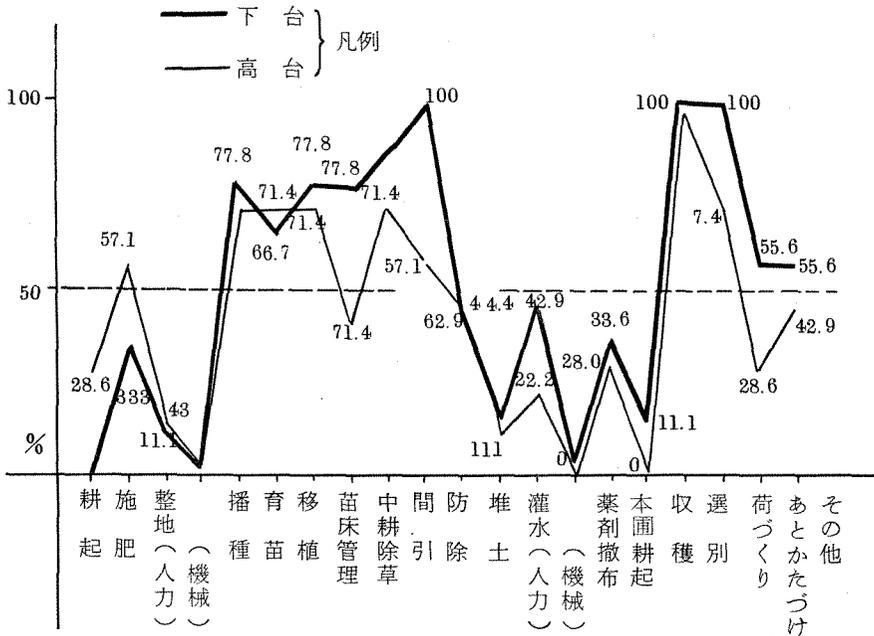
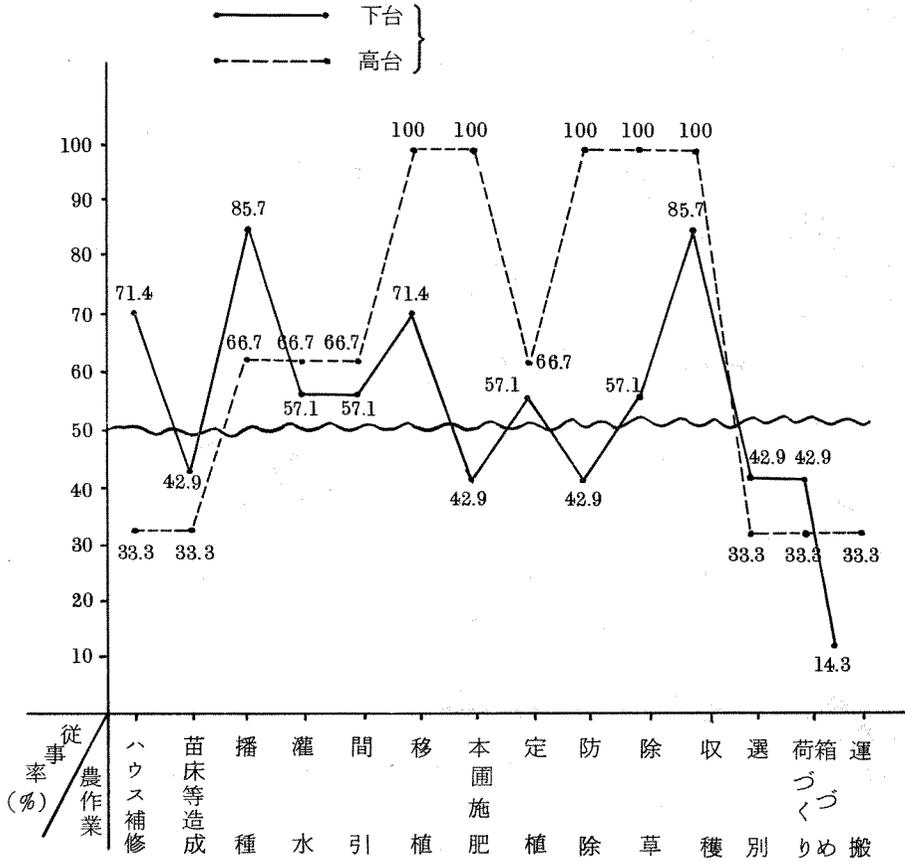


図3 ハウス栽培農作業従事率



えて、農作業における婦人の地位について表8、9をみると、下台と比較して高台婦人が従属的であることがわかる。とりわけ高台の畑作専業経営で従属的なことが目立っている。

表8 農作業における主婦の地位

	下台	高台
自分が主になって	23.0%	8.7%
他の家族と同じ	38.5%	65.2
自分が従になって	38.5%	17.4
時々手伝う		4.3
従事していない		4.4

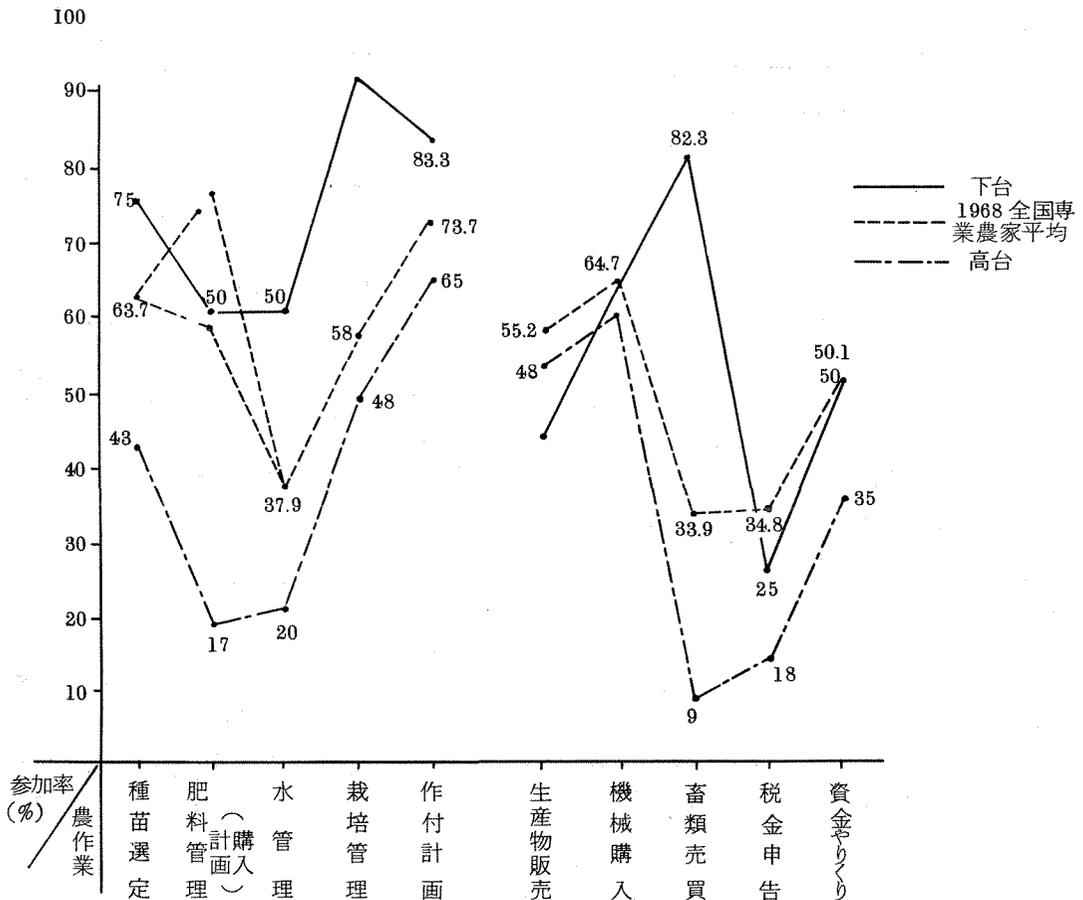
(注) 調査対象者 下台13人  
高台22人

表9 農作業のわりふりは誰がするか

	下台	高台
主人	33.3%	43.5%
主婦	8.3%	0
主人・主婦相談して	58.4%	47.8
その他		8.7

(注) 調査対象者 下台13人  
高台22人

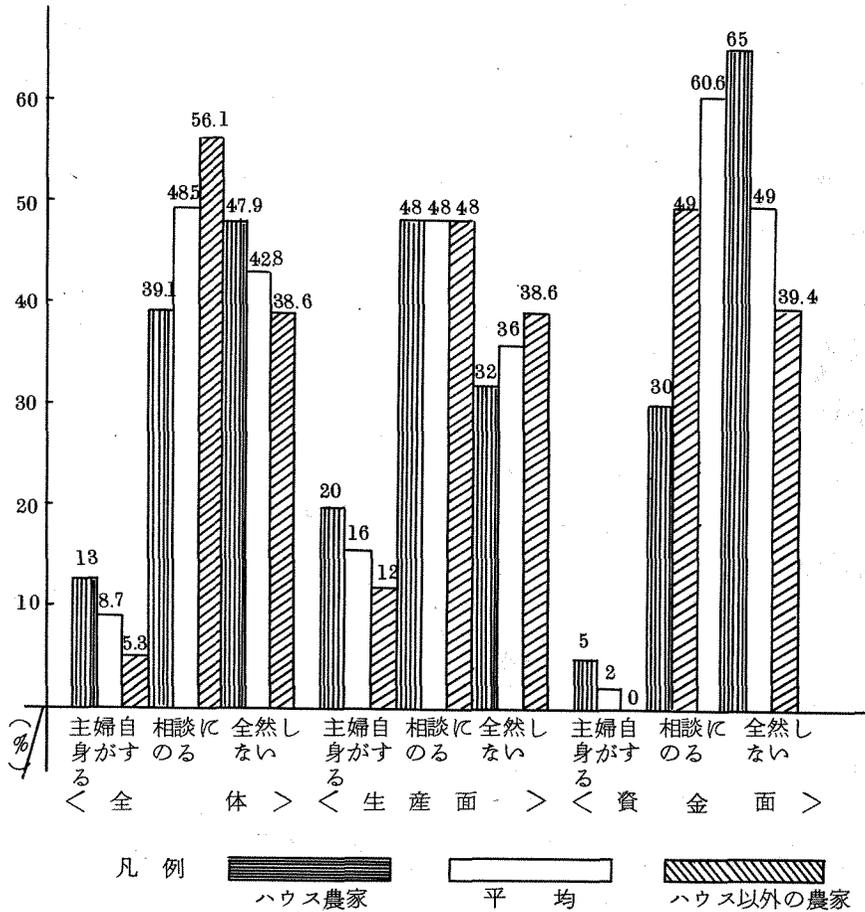
図4 主婦の経営参加について



(注) 1. それぞれの農作業について「自分でやる」のほかに「主にやる」「相談をうける」を加算したもの。  
 2. 1968年、労働省婦人少年局調査 「農家婦人の労働と生活に関する意識調査」による。

こうした下台の婦人の農業における比率の高まりは、経営参加において如実にあらわれている。図4は下台・高台の経営参加状況と1968年度労働省婦人少年局による「農家婦人の労働と生活に関する意識調査」の専業農家の経営参加状況をグラフにあらわしたものである。高台は生産面についてもすべて下台および専業農家を下まわっている。一方、下台は生産面についてはほぼ専業農家をうまわっている。このように高台の農家婦人の経営参加の低さと下台において、とりわけ生産面での経営参加の高さがりがわられる。下台地域についてハウス農家と他の農家の参加状況を比較したのが図5である。下台の中でもハウス農家における生産面での経営参加が高いことがわかる。

図5 経営形態別主婦の経営参加率



しかし、他方、増大する従事日数、及び長時間作業がしいられる中で表10~12をみると明

表10 作業中の休けい時間

標準的農家	午前・午後	1回
	10~20分	
午前中に休みとらない	下台 3戸	23.3%
	高台 2戸	9.1%
午後中に休みとらない	下台 1戸	7.7%
	高台 3戸	13.7%
昼休み 30分以下	下台 4戸	3.3%
	高台 3戸	13.7%

表11 農休日の実施状況

	決まっている	決まっていない	決まっているうち	
			休める	休めない
下台	50.0%	50.0%	50.0%	100%
高台	45.4%	54.6%	60.0%	30.0%

解答者数 下台 13戸 高台 22戸 無解答 10%

表12 産前産後の休養

	下台	高台
産前に休養しない農家	4戸 23.3%	7戸 31.8%
産後床につかない農家	1戸 8.3%	3戸 13.6%

回答数 5戸 回答数 7戸

らかなように、休養も十分にとらず農作業にかりだされていることがわかる。こうしたことは表13、14のように農家婦人に農作業上の障害、さらには肉体的影響を及ぼすとともに、表15、

表13 防除作業に伴う症状の訴え

農番	家号	症状内容	農夫症点数
2-4		顔がかゆい時がある	4
2-5		4~5年前背負で2~3ヶ月気分が悪くなる	4
2-9		手がかさかさ	9
2-19		はだがかぶれる	9
2-20		一度中毒症状おこす	2
2-22		くしゃみ、せきがでる	8
2-23		使用後目がいたむ	6
1-1,2;2-1,2,18,26は作業せず			平均6
訴え率 下台0% 高台36.8% (作業しているもの)			

(注) 農夫症点数 高台平均3.8

表14 ハウス作業時の自覚症状

農家番号	症状内容	ハウス当り 作業は苦しいか
1-2	風の通気が良くないので息苦しい	苦しくない
1-3	冬にかぜをひきやすい	苦しくない (畑に比べて)
1-5	頭が痛い、腰がいたい	苦しくない (なれた)
1-6	あつい時頭がいたい	苦しくない
1-7	くらくらする	苦しい
ハウス農家訴え率 100%		

16のように病気になったり、あるいは農夫症と呼ばれる慢性的疲労にかかっている。図6は農

表15 過去一年間に病気で床についた回数

下台	2回 1人	7.7%
高台	1回 7人 2回 1人	36.4%

(注)  
解答者13人中  
解答者22人中

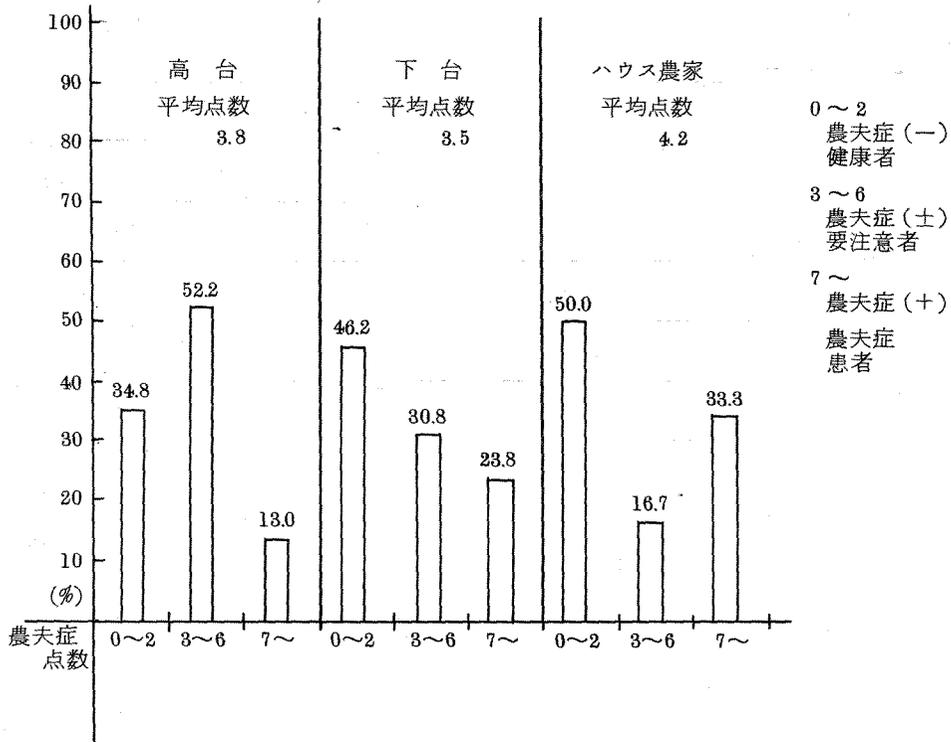
表16 過去一年間医者にかかった数

下台	2人	15.4%
高台	9人	39.1%

夫症点数の構成比をあらわしたものである。両地域とも、必ずしも健康とはいえないものが5割をこえ、ハウス農家の点数が高い数値を表示し、ハウス作業による複雑な影響が考えられる。しかし、健康者が半数で、農夫症患者が要注意者と比較して鋭角的にあらわれていることは、健康管理等の主体的克服の努力があるのではないと思われる。

それでは婦人は自分の健康状態について、どれほど自覚しているのだろうか。過労の自覚について表17をみると、下台では過半数の婦人が過労だと自覚しているのに対し、高台では2割にとどまっている。これは高台での機械化による労働軽減、他方、下台でのきびしい労働状況を反映していると考えられるが、さらに健康に対する意識が下台の方が高いという自覚のレベルのちがいがあらわれているのではないと思われる。さらに過労を解決する方策では、下台では「農休日をふやす」に対し、高台では「休養の確保」が出されているのは下台で農休日が設定されている地域があり、さらに「ふやす」という意識があるのに対し、農休日が設定されていない高台ではこの問題について認識の弱さを反映している。医療問題では、高台において不満度が高くな

図6 農夫症点数構成比



っていることを付記しておきたい。

表17 過労の自覚度合

過 労 の 自 覚	下 台	高 台
過労であると自覚しているもの	62%	22%
過労でないと答えたもの	38	39
解答なし	0	39
過労を解決する方策	1.労働時間の短縮 24% 2.農産物価格を引き上げる 24 3.農休日をふやす 18	1.休養の確保 15% 2.栄養の改善 15 3.労働時間の短縮 12 4.農産物の価格引き上げ 12

(注) 過労を解決する方策については上位から抽出

次に家庭生活の状況について述べたい。婦人の農業従事は生活過程に矛盾をしわよせしているにちがいない。表18(A)、18'(B)及び図7により生活時間を検討すると、睡眠時間や家事時間を農作業時間にまわしていることがわかる。しかし、下台では相対的に家事時間が長くとりわけハウス農家では1時間も農作業が長く、睡眠時間を減らすことによってその分をうみだしているが、なおかつ家事を確保しようとしていると考えられる。この点にかかわって表19の家

表18(A) 階層別生活時間  
(下台) (単位:時間)

	睡眠時間	農作業時間	家事時間	家事+農
下台平均	7.05	10.16	3.07	13.23
a	6.18	12.24	2.36	15.00
b	7.00	6	4	10.00
c	7.45	10.10	2.40	12.50
d	7.30	11.15	2.00	13.15
1-1	7.00	12.30	1.30	14.00

表18(B)  
(高台) (単位:時間)

	睡眠時間	農作業時間	家事時間	家事+農
高台平均	6.50	11.01	2.12	13.13
a	8.00	8.30	3.45	12.15
b	6.36	11.06	2.30	13.36
c	6.02	11.06	2.30	13.36
d	5	12.30	3.00	15.30
d'	7.30	11.15	1.20	12.35
2-18	7.00	10.30	1.30	12.00
2-24	8.00	8.00		

図7 職業別生活時間割合

有職婦人

眠時間	仕事時間	家事時間
7.34	6.55	3.06

農林漁業者

眠時間	仕事時間	家事時間
7.48	6.16	4.01

自営業者

眠時間	仕事時間	家事時間
7.17	7.24	3.49

(注) NHK 国民生活時間調査 1974年10月  
「日本人の生活」より

事時間の意識をみるならば、下台での積極性、高台での消極性が明らかにみられる。

表19 家事時間についての考え

	下台	高台
ふやしたい	30.8%	22.7%
やむをえない	30.8	9.1
今のままでいい	30.8	68.2
減らしたい	7.7	0

さらに表20をみるならば、料理の献立で努力していることについて、講習会への参加が下台で66.7%、高台で13%となっており改良普及所の活動による触発が大きく要因していると考えられる。

表20 料理のこんだてで努力していること

	下台	高台
料理雑誌でこんだてを考える	41.7%	34.8%
テレビなどでこんだてを考える	8.3	13.0
農繁期には手間のかからないものを	25.0	26.1
卵肉などでたんぱく質に気をつける	25.0	13.0
その他	50.0	30.4

(注) その他のうちわけは次の通り

(下台)

講習会 66.7%

栄養のバランス

野菜のとりかた

(高台)

講習会 14.3%

栄養のバランス

野菜のとりかた

次に、婦人の社会的諸活動を概観することによって、婦人の社会的な地位の状況を明らかにしたい。表21を参照すれば、部落会への参加率は両地域ともきわめて低いが、研究会や農協婦人

表21 村の行事等への参加状況

村の行事や 学習の機会について	下台	高台
部落会	1.いつも参加 9%	1.いつも参加 9%
	2.時々参加 9	2.時々参加 4
	3.参加しない 82	3.参加しない 87
研究会	1.いつも参加 18%	1.いつも参加 9%
	2.時々参加 36	2.時々参加 22
	3.参加しない 46	3.参加しない 69
農協婦人部 若妻会など	1.いつも参加 67%	1.いつも参加 42.1%
	2.時々参加 33	2.時々参加 27.3
	3.参加しない 0	3.参加しない 39
役場・農協との連絡	主人 100%	主人 ほぼ100%

部の参加状況では、明らかな相違がみられる。下台での積極的姿勢が多いのに対し、高台では相対的に消極性がみられる(表22)。さらに「入ってよかったこと」についての解答によると単

表22 (A) 農協婦人部、若妻会の加入状況

	下台	高台
加入している	84.6%	70.5%
していない	7.7	29.5
未解答	7.7	

(注) 下台13戸  
高台22戸

(B) 加入してよかったこと

(下台)(11戸)		(高台)(16戸)	
親睦、交流	45.5%	交流、人の和	37.3%
研修旅行	9.1	視野がひろがる	25.0
料理、健康調査	9.1	役だつ	31.3

なる親睦を求めることにとどまらず知識吸収を求める積極的解答をだしている。この積極性を発展条件としてみていく視点は必要であるが、婦人の学習組織が農協婦人部組織に限られていることがこうした段階のちがいをうみだしたものとえよう。

今までに述べてきた調査結果をふまえ、学習要求調査結果について特徴的なことをのべると次のようである。家庭生活上の要求が群を抜き、他方、社会的・政治的要求はきわめて少ない。しかしその中でも中層から下層にかけて「社会保障」をはじめとした社会的・政治的要求がだされている。また下台では「保健衛生看護の知識」が高くだされていることに注目したい。生産面では「肥料の知識・使い方」をはじめとする生産技術学習要求が強くだされ、学習方法では集団学習を望む声が多い。生産面において研究会が多いが、高台において生活面で研究会・研修会が多く出ているのは、先ほど述べたように、高台において生産学習が行なわれていないことの反映であろう。また個人学習を望む声が下台畑作専業中農層、高台中農層のみであられ、さらに、「経済的負担がなければ」という声がこの層のみであられている。これらは、下台畑作専業は「研究会」に加わらず個人的対処におわっており、他方、高台中農層はもっとも矛盾が集中している層であるが集団的克服がなされていないために個人的解決をはかろうとしているのではないかと思われる。

今まで述べてきた調査結果の傾向から、下台・高台両地域の婦人の状態に相違がみられることがわかる。

下台では厳しい労働条件のもとで、生産学習を行ない、積極的に経営に参加し、さらに生活向上を志向している。

高台では、単なる働き手の意識にとどまっており、家庭生活、農業経営、あるいは社会状況に対し不満をもちながらも、それらを要求して自覚しえないでいると考えられる。

#### 4 農協婦人部の生産と結びついた学習

婦人調査の分析結果における両地域の相違に関連して以下では美沢生産婦人部の活動についてふれる。

表23を参照すれば、婦人集団の業的・質的發展がうかがえる。

昭和42年に「そ菜技術研究会」が結成された。おりから、洞爺農協婦人部に婦人の要求にそった野菜栽培研究グループ・手芸グループ・民謡グループができ、美沢の婦人は、この野菜栽培研究グループに加わり、「そ菜技術研究会」の学習会への参加、あるいは共同育苗・市場視察を行なっていく。昭和45年ごろには、他の二つのグループが消滅していく中で、野菜栽培研究グループは美沢生産婦人部へ自主化し、婦人部独自の学習を行なっていく。昭和46年の構造改善事業の開始される中で両胆振地区改良普及所へM氏が生活改良普及員として赴任し、美沢部落に対して重点指導地区の指定による活動が始まり、改良普及員の献身的援助をえながら、美沢生産婦人部の生活改善・健康管理の活動が始まる。生活時間調査や農夫症調査などから、労働に適合した休養が不十分で疲労を訴えていること、農繁期の家事時間が少ないことなどを知り「30分早くあがることを」主人に理解させる努力をしてきた。そして昭和49年には「そ菜技術研究会」の総会において農休日の設置を婦人達が提案し決定されている。こうした美沢生産婦人部の活動

表 23 洞爺農業の歴史

年度	洞爺農業の変遷	婦人中心の活動推移	農	協	
昭和 31	下台、高級菜豆の主産地連作障害・台風被害により経営不安定、小家畜で補充するが成果なし	(昭和30) 洞爺村農協婦人部発足	<地力対策> 心深混 土土層 破耕耕 碎 (高台中心)	生産力増強 農協体制の整備	
32	S氏、トマト栽培木骨ビニールハウスでとりくむ。				
33					
34					
35	育苗用藻岩型鉄骨ハウス導入、技術導入の学習始める。				低階層対策
36					
37	D型パイプハウス導入。12戸が促成トマト、抑制キュウリ栽培突入。豆作経営脱皮				もうかる農業
38					
39					農業の近代化 下台複合化 高台経営の安定
40					
41	(2月)洞爺村そ菜技術研究会結成 会員20名 会費200円	成香部落新生活運動の学習に入る。	反転客土 (~46年)		
42		新生活運動推進指定村となる このころ農協婦人部に野菜栽培研究グループできる	堆(肥和 生牛・自 産給飼料)		
43	農協が野菜の集荷販売でかける共同育苗ハウス建設、府県先進地農家滞在研修制度発足、野菜の幕あげ	成香農休サイレン設置 成香会館できる			
44	共同育苗実施、グリーンアスプラ・トマト共撰開始、国道230号線開通				組合員との密着化 生産基盤整備 農用地確保 離農者対策
45	草地改良	このころ美沢生産婦人部発足、研修・共同育苗・先進地視察			
46	トマト用小型共撰機導入、第2次構造改善事業開始(~51年)				
47		M氏、改良普及所赴任。美沢及び成香部落重点指導地区となる。健康管理・生活改善始まる。生活改良普及員と保健婦による連絡協議会発足。美沢生産婦人部の生活改善運動始まる。			農用地確保
48	大型共撰機導入。洞爺村高原野菜研究会発足 会員40名。				
49		そ菜技術研究会で月2回の農休日決定する。以降農休日のうち1回に婦人部の会合設ける。			
50	現在、そ菜技術研究会・会員48名、会費3,000円、共同育苗・第2次構造改善事業推進。	農協婦人部総会で冷凍庫集団購入決定。美沢生産婦人部現在20戸30数名。			

は、農協婦人部の活動をたえずもりたてていく。美沢生産婦人部を中心とした美沢婦人部の生活改善運動が活発化していくが、とりわけ、農休日を利用した婦人部の例会開催はさらに活発化させていく契機となっていく。

昭和50年には農協婦人部総会で冷凍庫の集団購入の提案によって100台余りの全村的共同購入が実施される。

## 5 洞爺村における農家婦人の発展の道すじと課題

施設園芸の主産地を形成している下台農家は、「高度経済成長」下の人口の都市集中と国民の生活様式の変化による野菜の需要増大によって消費農産物市場が拡大していく、そうした変化の過程に位置づいている。それは不安定な価格変動の作用する市場メカニズムに編成されていく過程であり、さらに巨額な農業投資、高い農業経営の増大が必至となり、生産財市場としても強力に掌握されていく。こうした中で農民は生産学習・共同作業、さらに共同撰果・共同出荷によって市場対応していく。

美沢生産婦人部の活動は技術交流・学習、あるいは共同作業をつうじて生産の主要な担い手として地域的・集团的生産力形成の一環を担う過程で、自己の労働を価値をうみだす生産労働として自覚化していく。婦人の集团的活動をつうじて、婦人の労働を自らが評価する一方、きわめて厳しい労働がしいられ、健康をそこねたり、生活を貧しいものに行っていることを認識し、男子に婦人労働を評価させ理解を求める一方、おのずからそうした状況を克服するための努力を行なっていく。

高台では、農業経営は各個別経営にまかされていて、生産学習や生産組織を基盤にした自主的集団形成がおくれている。婦人は省力化によって労働は軽減されているが、経営向上のための積極性は弱い。しかし、近年、下台の研究会活動に触発されて、ビート研究会、高原野菜研究会などの研究会活動が活発化してきた。ビート研究会の婦人の参加の年はビートの反収が高まるという事実は農業生産における婦人の労働の位置を物語っている。さらに高原野菜の導入は婦人の労働を不可欠なものとしていくであろうし、そうした中で「研究会」への参加などによって婦人の集団形成もうまれていく条件は十分にあると考えられる。しかし、下台・高台両地域とも、資本主義的矛盾に目をむけていくという点ではまだ弱い。「学習要求」で「農産物価格や市場のしくみ」についての要求が多かったこと、あるいは中・下層で社会的・政治的学習を望む声があったことに注目する必要がある。こうした要求をどう実現していくかは大きな課題である。さらに、下台婦人の市場視察や、高台での加工資本に対する対処も農民の市場対応として今後重要な課題となってくるであろう。

また、農協労働者、自治体労働者などの組織的な地域農業の発展への努力も課題である。

さらに、婦人の要求をも反映させていけるような全村的住民自治をつくっていくことが課題となる。

## 6 ま と め

洞爺村を実例にして、婦人の生産を基礎とした自主的集団形成をとうして婦人自身が成長していく過程を考察してきた。しかし不十分な点として、(1)下台ハウス農家を中心に分析し、他の農家婦人の発展条件を十分につかめなかった、(2)調査農家戸数が少なく十分に階層をもとに分析しきれなかった、(3)婦人調査とあわせて経営主の婦人への意識、あるいは青年層の活動・意識状況もつかんで、家族内の婦人の位置をつかむことができなかった。

これらの諸課題については、いずれも今後ひきつづき追求したい。